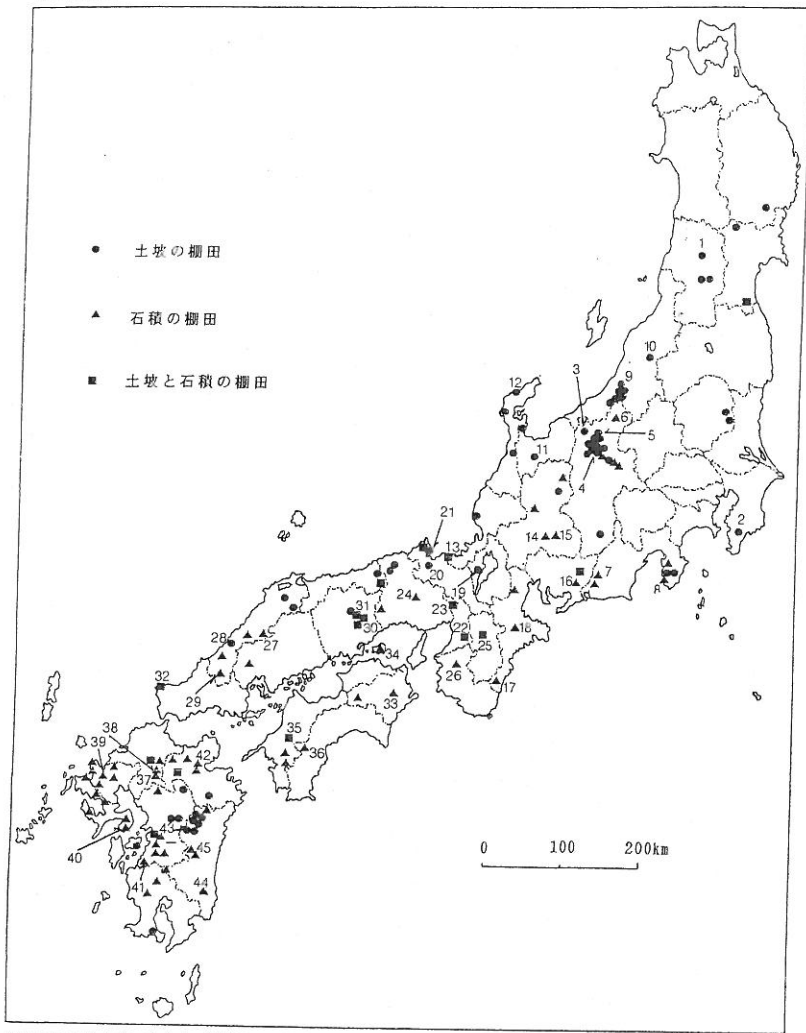


棚田分布図



図中の番号は本書でとりあげた棚田に対応。

# I

## 山形県大蔵村四ヶ村 東北一の景観

山形県は、棚田百選に三か所が選ばれている。二〇〇〇年のゴールデンウィーク後半、まず山形市の近くにある山辺町大蔵と最上川の河岸段丘上にある朝日町能中の棚田をみて、大蔵村四ヶ村、現在の豊牧・沼ノ台・滝ノ沢・平林の四集落を訪ねることにした。

山形駅前のホテルに泊り、翌朝下り一番の新幹線で新庄に向かう。かつて奥羽本線の一乗換駅にすぎなかった新庄駅はターミナル駅に姿を変えていた。新幹線が到着した先のホームでは秋田行き快速列車が止っていた。

駅前から湯治場の温泉として知られる肘折行ききの山形交通バスに乗る。乗客は、私と若い娘さんの二人。途中さらに二人ほどお年寄りが乗ってきたが、大蔵村に入ったときには私一人になっていた。運転手に行先を告げ、最寄りの停留所を聞くと、葛郷で降りるのがよいということであった。

萬郷の停留所は標高三五〇メートルの台地上にひっそりとあった。近くに人家はまったく見当たらない。西は銅山川、東は赤松川支流によって台地が刻まれ、狭い尾根になっているため、眺望はよく、南西方向に雪で真っ白の月山が見える。その山頂は、なだらかで楯を伏せたような形をしており、アスピーテの特色をよく示している。道路脇にある林野庁東北森林管理局の大きな看板が目に入る。銅山川流域では火砕流堆積物（シラス）に厚く覆われ、そのうえ多雪地帯であるため、地すべりが多く、その対策事業が行われているという説明である。地図をみると、銅山川の流域は朝日台・湯の台・下湯の台・沼ノ台・塩台、それから鏡金野・深沢野・今小屋野・蕨野など火砕流堆積物によって形成されたと考えられる台地を示す地名が多くみられる。

停留所から雪で折れ曲がったガードレールのある急坂を下ると、谷には厚い雪が残っていたが、冬の終わりを告げるかのように、斜面の落葉樹は淡いみどり色に装いを改めていた。赤松川支流の谷に架かる橋を渡ると、ゆるい坂道に変わった。曲がりくねった坂道を上りきると、急に視界がひらけて比較的平坦になり、代掻に備えて水が入り始めた棚田と人家が現れた。豊牧の集落である。

集落のつつきにある長南家では、一家で薪を積み上げる作業をしていた。息子さんらしい人に棚田百選地の四ヶ村の写真をみてもらい、どの辺りか尋ねると、一家の人が集まり、あそこだ、ここだとまとまらなかつたが、そのうちにとうさんとあさんの意見が一致し、集落の南一キロにあるうちの田圃のことになるということになった。

倉庫のたたきに腰をおろして、とうさんに集落の様子を聞くと、戸数は四二戸、各農家の水田の耕作規模は一・〇〜一・五ヘクタールで、ほとんどが村内の土建業や新庄・山形の企業で働く雇われ兼業農家とすること。棚田保全の取組みや直接支払制度の話をしてみたが、具体的な動きはないとのことであった。か

あさんが息子を集落の万屋に走らせて買ってこさせた缶コーヒーをご馳走になる。腰を上げて棚田に向かうおとすと、とうさんが車を出し、長南家の棚田まで連れていってくれるとのこと、ご親切に甘えることにした。

案内してもらった棚田は、東北地方で選ばれている六つの百選地のなかでは、最も景観の優れたものであった。とうさんと別れ、最上部の棚田の畦に立ってみると、赤松川の上流の一つ横道沢の断崖に向かって、比高差にして七〇メートルほどの高さから傾斜五分の一の斜面に二〇〜三〇段の棚田が六〜七列になってひらかれているのが俯瞰できる。個票の傾斜二〇分の一、面積一二・五ヘクタール、枚数一三四枚とはだいぶ様子が違う。上流部や山際の部分はかなり耕作放棄が進んでいるが、中段から下段にかけてはほとんど耕作されている。ところどころに雪が残っている土坡の畦畔は枯草に覆われているが、わずかに薄いみどりもみとめられる。その高さは二〜三メートルほどのものが多いが、河床に近い部分は三〜四メートル、あるいはそれ以上のものもみられる。長南さんはこの法面の草を年に四回刈るといわれていたが、大変なことだろうと思った。形は、比較的整然とした長方形のものが多く、一枚の面積も五〜一〇アールはあり、棚田としては一枚が大きい。

その形や一枚の大きさから、小さな区画の枚数を大きな区画の一枚にする畝町直しが行われたことがわかる。長南家では、一九八五年頃に業者依頼して一枚平均二アールの一〇枚の棚田を、一〇アールの棚田二枚に畝町直しを行い、四〇万円を支払ったとのことである。このように、四ヶ村の棚田では、事業としての圃場整備ではなく、個人の力によって一枚ごとの面積を広げる努力がなされてきたのである。

最上部の棚田付近の等高線に沿う大堰の用水路では、代掻期を前にして矢のような速さで水が流れていた。その水源は長南さんの話だと湯の台牧場付近ということであったが、ここから数キロは遡った地点で

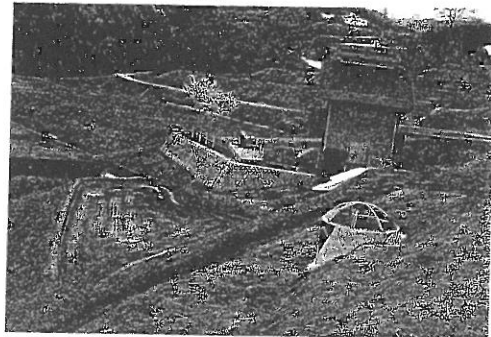
ある。

棚田は、集落の近くになると、さらに傾斜がゆるやかになり九分の一程度である。一枚の面積も大きく、どれも一〇アール以上の広さがある。大型機械が十分に使える広さのためか、耕作放棄はほとんどなく、よく管理されている。赤松川の崖の向こうに滝ノ沢の集落と棚田が展開しているのを遠望することができる。

集落に接して、最近つくられた豊牧地区地すべり資料館があったが、残念ながら閉館して見学する

ことはできなかった。その正面に、地すべり対策事業で設けられた豊牧排水トンネルの入口と、その上の棚田には集水井があった。プレートには豊牧地区第一六号集水井、一九八八年三月竣工、直径三・五メートル、深さ二・三メートル、排水工七二・九メートル、集水工一九本とある。国営事業による大がかりな工事で、蛸足のように設けられている一九本の集水工から集められた地下水を約七三メートルの排水路を通じて川に出していることがわかる。井戸を覗いてみると、深さを感じ、井底で激しく水が動いているのがみえた。地すべり地を利用して棚田がひらかれ、その地下では多量の雪解け水が集水井に集められて排水されている。それによって地すべりから棚田が守られているのであるから、地すべり・棚田・地下水の三つは深い繋がりを持った関係にあるといえる。

ひきあげる準備をしていると、空の運搬車に乗って作業から帰ってきたとうさんに近くにある第三セクターの郷土料理伝承施設「ふるさと味来館」



のそばが美味しいので食べていたらとすめられた。

早速、味来館を訪ねてみると、入母屋づくりの堂々たる建物が迎えてくれた。ゴールデンウィークの間ということもあって、大変な賑わい、席をみつけるのに苦労するほどである。自慢のメニュー「板そば」を注文すると、長方形の大きなせいろに行儀よく並べられたそばと採りたての山菜のてんぷらが出され、どちらもシンプルな味で満足のいくものであった。

店の三面の壁には、大蔵村教育委員会で調べられた四ヶ村地区の年中行事が書かれた紙が貼られていた。五月、「なつき」は田植のこと。「苗びらき」は苗代に種を播いてから三三日目に少し苗を取って、初田植を祝うこと。この日ミズ（山菜）と豆をホオノキの葉に包んで神さまに供え、はじめてミズを食べる。この日より前に食べると水不足になるといわれる。一〇月、「雪囲い」学校・寺の雪囲いをして餅をついて祝う。十一月、「なでよけ」雪崩除けのことで、赤飯を炊いて神さまに供え、それを食べると雪崩にあわないといわれるなど。

再び長南家まで戻ってきたとき、薪はきれいに積み上げられており、家の外に人影はなかった。停留所にたどり着いて南西方向に目をやってみたが、雲が低くたれ、優しい月山の姿をとらえることはできなかった。

## 柵田観音が見守る杭掛けの隊列

### 山形県山辺町大蔵一

山形県山辺町は、地理的には山形市の裏庭ともいえる白鷹丘陵の中央部を占めている。山形市街地からは狐越街道を西に進めば白鷹丘陵に至ることができる。そこには湧水に育まれた湖沼群が点在し、県民のレクリエーションの場、県民の森がひろがっている。

しかし、山辺町大蔵を訪ねる場合は狐越街道からではなく、JRフルーツライン左沢線の羽前山辺駅から県道一六号線をたどるのが通常のルート。駅名はやまべ、町名はやまのべ、部外者にとつては紛らわしい呼び方である。その経緯は、昭和の大合併で、山辺町と周辺の数か村が一緒になったとき、駅名は変わらなかったが町名は町域の違いを示すため、「の」を加えて呼ぶようになったのである。

これまで大蔵は、二〇〇〇年五月、二〇〇三年六月といずれも初夏に訪ねている。しかし、大蔵の柵田は、杭掛け（掛け干しの一種）の景観を見ずしては語れないという思いから、二〇〇四年一〇月初旬、杭

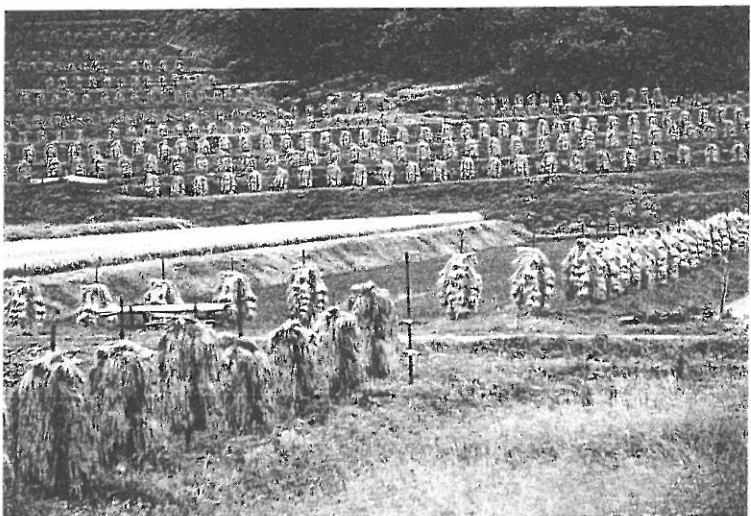
掛けが圃場を埋めつくしたという知らせをうけ出かけることにした。

山形駅を八時一七分発の列車に乗り、八時三〇分には羽前山辺駅に着く。駅前から町のコミュニティバスがあることを知っていたので、時刻表を見る。休日はいくつかは二便、しかも月・水・金のみの運行、訪ねた日は火曜日、情報不足であったことを反省する。丘陵の尾根を越えなければならず、歩けば二時間以上はかかる距離、仕方なくタクシーに乗った。

タクシーは狭い市街地を出ると国道四五八号を北上。大寺の交差点を直進し、県道一六号線をたどり平坦地の山形盆地から、すぐに白鷹丘陵地に入る。杉下、相ノ沢の集落を過ぎると急勾配となり、鳥海橋を渡る。鳥海トンネルを抜け、四三〇以上の高さまで上って行く途中、眼下にひろがる山形盆地の景色を楽しむことができる。道が下りはじめると標高三五〇〜四〇〇以上の高さにある大蔵の盆地が見えてくる。大蔵は大字地名で、東、中丸、前方などの集落が直径六〇〇以上の円で描かれる小さな盆地のなかに納まり、他の集落からは隔絶された世界をつくりだしている。山辺町の出先である中支所前で車を降りる。コミュニティバスの停留所前方付近が大蔵柵田の中心、道路脇に日本の柵田百選大蔵柵田の看板が立っている。

看板の辺りから東を眺めると、ほぼ大蔵柵田の全体を目にすることができる。整然と隊列を組んだ杭掛けの出迎えは壮観である。盆地床から盆地を囲む丘陵の頂までの高度差は約一〇〇以上、浅い谷の部分ではほぼその半分の高さまで柵田が這い上がっている。

集落は盆地を囲む丘の麓に立地し、そこから中心に向かって柵田が展開している。個票によれば傾斜七分の一、面積三・四ヘクタール、枚数二七枚、法面土坡となっているが、これは見える範囲のすべてではなく、その一部を示しているにすぎない。正面にある中心ブロックの柵田だけでも、急斜地に一七段、手前の緩



斜地に数段、急斜地の一部は各段が二区画になっているので二七枚ちかくはある。その南に一ブロック、北に五ブロック、それぞれのブロックを区画する農道が県道から集落に通じている。

区画整理された棚田は、大部分が長方形、面積一〇㍎、なかにはそれ以上のものもみられ、乗用型の機械が利用できる広さ。したがって、中心ブロックの急斜地にある棚田の法面は高さが四〜五㍎はある。それぞれの圃場は長方形の長辺が県道と平行になっている。杭掛けは、この長辺の畦に一・五〜二㍎間隔、一〇㍎当たり三五〜四〇本立てられているので、県道からみると横列になった杭掛けの隊列を見るようになる。中心ブロックの急斜地の部分だけでも、一七列のうち、休耕やコンバインで収穫された三列を除く一四列に杭掛けがあり、各列三五本とすると合計四九〇本になる。この数字を基礎にして考えると、全体で約二、〇〇〇本、三五本の小隊がおよそ六〇組、横列の体形で向かい合っている光景を想像していただきたい。実に見事であり、盛観である。

大蔵棚田オーナー制度推進協議会長の斎藤盛雄さんが杭掛けを撮るには一五時三〇分から一六時にかけての陽光が一番よいという情報を発信したため、この時間帯になるとカメラマンの数が増えるそうだ。

杭は、根元の直径が六〜七㍎程度の丸太で、根元から五〇㍎と一㍎のところに長さ三〇〜四〇㍎の横木が紐で結び取りつけてある。稲束の積み方は、まず下段の横木の上に、杭を挟むようにして二把を乗せる。この場合、稲穂を内側にする場合と外側にする場合がある。それから、時計回りに九〇度ごとに稲束を積み上げていく。上段の杭まで一五段、それから上段の杭の上にさらに一五段を積む。最後の一五段目は、一把は同じように積むが、一把は紐のところで二つに割り杭に挟んで飛ばないようにする。出来上りは、杭を中心にして四方方向に稲株か稲穂が歯車のように張り出した形になる。

稲束は、一本の杭に合計二把×三〇段の六〇把、六把を一束とよび、一〇束が掛けられる。一束が一升、一〇束が一斗の米になるといわれるので、杭四本分が一俵（四斗）の米になる計算。乾燥期間は一回当たり雨が降らなければ約一週間、一回または二回の掛けかえが行われる。このため、端の方に一本か二本、掛けられていない杭が立っている。掛けかえは、この杭を利用して移しかえられていき、最初稲穂が内側の場合が外側に、外側の場合が内側にする。普通、一回の掛けかえの場合、稲穂を最初内、掛けかえで外へ、二回の掛けかえの場合、稲穂を最初外、一回目の掛けかえで内、二回目の掛けかえで外にする。雨が降ると三日ほど乾燥期間が延びる。収穫後、天日乾燥の場合、これだけの労働が必要なのである。

山辺町中支所長の渡辺政裕さんに話を聞く。大蔵は、五〇戸の集落でほとんどが農家。しかし、水田の平均耕作面積は五〇㍎、目玉になる畑作物、果樹作物もなく、町内または山形市へ勤めに出る兼業農家が多いとのこと。専業農家は畜産かわらびなどの山菜に依存しているという。杭掛けについては、今年は景観に厚みと深みがなくなったと仰しやる。支所二階の窓から眺めると、盆地の北の部分を中心に十数枚が



すでにコンバインで刈り取られ、歯が欠けたように杭掛けの隊列がない。たしかに、杭掛けの隊列に厚みがなくなっただよように感じられる。これは、二〇〇一年から二〇〇三年までは柵田地域水と土保全基金事業による補助金が大蔵や作谷沢地区の杭掛けに対して二〇〇万円ほど支出されていたが、二〇〇四年よりそれが打ち切りになったことによる影響かもしれない。

渡辺さんから電話を受け、二〇〇〇年に新庄市で開かれた「もがみグリーン・ツーリズム・フォーラム」以来の知己であるオーナー制度推進協議会長の斎藤さんが支所に来られた。斎藤さんは六七歳、奥さん六二歳、山形市内の病院で看護婦をしている娘さんと三人暮らし。柵田を耕作するほか、天童や仙台市場で購入した小牛を飼育する肥育牛農家である。以前は二五頭ほど飼育していたが、二〇〇四年から一〇頭以上飼育する場合、糞尿処理が義務づけられるようになり、その施設投資が一、〇〇〇万円以上に及ぶため、現在は九頭の牛を飼っていると仰

しやる。

柵田オーナー制度も五年目を迎え、口数こそ増えていないがしつかりと根付いた感じである。杭掛けに対する補助金が打ち切られてどうするかということになったとき、昨年度不作で収量が少なくなっても不満をもらさなかったオーナーたちに、今年こそは収量の多さを収穫作業によって実感してもらおうというこで杭掛けを継続したとのこと。オーナーに後押しされた杭掛けともいえる。柵田オーナー制度推進協議会が主体になり、二〇〇二年からお盆の八月一五・一六日、中心ブロックの急斜地にある柵田五段の畦に、五刈おきに紙のアンドン三〇箇、ビニールのアンドン五〇箇を立て、ローソクの火を点す落ちこぼれアンドン会が開かれている。盆踊り大会の日、花火が上がる前のイベントとして企画されたもの。「何故落ちこぼれなのか」尋ねてみると、集落のなかで、役職から外れている六〇歳以上の人々が中心になって行っているからとのこと。集落一丸となってオーナー制度を盛り上げようとする姿勢が読み取れる。当日は、五〇〇人を越える人々が、静かな山里の夜のイベントに集うそうだ。

最後に、集落内にある寺院、瑞永寺境内に二〇〇二年に建立された柵田聖観音を訪ねる。高さは三層近く、左手に稲束を持った立派な石像の観音さま。中心ブロックの柵田を正面にされ、盆地内のすべての柵田を見守っておられる風情である。その穏やかなお顔をみながら、今後の保全活動の発展を祈念して大蔵を後にした。



## 神さまが落とした扇田

山形県朝日町能中（榎平）

山形県朝日町は、山形市のほぼ西、白鷹丘陵を越えたところに位置し、最上川に臨んだ河岸段丘の発達した町である。能中は最上川左岸の河岸段丘上の集落で、一段低い右岸の朝日町の中心市街地、宮宿を見下ろすことができる。

二〇〇四年一〇月中旬、朝日町能中を訪ねる。山形からJRフルーツライン左沢線に乗り、終着の左沢で下車。三分ほど待って宮宿行きの山交バスに乗り換える。バスは国道二八七号線を南下、最上川に架かる明鏡橋を渡り、右岸の河岸段丘上の集落の一つ、四ノ沢でバスを降りる。

宮宿に向かって歩き始めてすぐ、道路脇の水田でイネの掛けかえをしているおじさんがいた。立ち止まって観察すると、山辺町大蔵とほぼ同じ掛け方である。杭は根元の直径が六〜七センチ、三〇〜四〇センチの長さの横木が二本、地面から五五センチと一一五センチのところに括りつけてある。内側に入れていた稲穂を外側に向け

る掛けかえをしている。最初は杭を挟み二把、次の段から九〇度ずつ向きをかえ時計回りに二九段、次は二八段積んでいる。普通三〇段、六〇把、一〇束といわれるが、数えているわけではなく、見当で積まれているものと思われる。

道に戻り、進むと一本松公園、棚田眺望の地・ヒメサユリ園の案内板が立っている。案内板に従い国道から右折して農道に入る。農道とはいえ、県営の一般農道整備事業によって建設された広めの片側一車線の立派な道路。一九九一年完成の最上川に架かる八天橋も立派なもので、この橋のおかげで能中の人たちは国道まで半分道で出てこられるようになった。最上川は、兩岸いっぱいひろがり、浅瀬の部分では音をたてて流れていた。農道は川通と西舟渡を結ぶ道路と交差するが、直進し元能中の集落を通り、坂道を「日本の棚田百選・榎平眺望の地」の看板がある一本松公園の下まで上る。

看板の背後、山の斜面は朝日町の花、ヒメサユリ（姫早百合）の群生地、淡紅色の花の季節はすでに終



わっていた。反対側の崖の下に地元の人が「神さまが落とした扇田」とよんでいる樞平の柵田がひろがっている。「神さまが落とした」というのは水田を熱望した農民に神さまが授けて下さったという意味であるのか。急坂を四〇ほど上り一本松公園から柵田を眺望する。

柵田は、個票によれば傾斜二〇分の一、面積一〇・五畝、枚数二〇八枚、法面土坡となっている。河岸段丘上にあるため、傾斜は緩やかであるが、段丘崖の林野で限られる段丘面いっぱいには柵田がひろがっている。全体は、集落を要にした扇の形、集落をステージに見立てればギリシャ・ローマ時代の古代劇場のように見える。区画は整然とした長方形、扇の骨の部分に当たる農道や畦畔によって一〇〜一二のブロックに分かれ、要に当たる集落に向かつて収斂している。柵田一枚の大きさは平均五ア、大きなものは畝町直しにより一〇アほどのものもみられる。

樞平は第二次大戦の頃までは、水源となっていた八ツ沼の貯水量が少なく、半分は桑畑であったが、大戦中に沼の嵩上が行われ、戦後開田されて現在のような整然とした柵田になったという。それにしても、小字名から名づけられている樞は普通サワラ、漢和辞典でもサワラの読みしかない。扇田の要に近い部分に、現在は作業小屋として使われている一軒の廃屋があり、樞平のへそになっている。その裏手に三本の樹木があり、クヌギであれば樞平の由来に関係するかと思っただが、実際はイチヨウとクリの木。結局、クヌギと読むようになった経緯はわからなかった。

各ブロックを区切る十数本の扇の骨のうち、農道は三本のみ。すべての圃場が道路に接しているわけではない。したがって、道に接した圃場の刈取りが終わった後、その圃場を通してでなければ機械が入らない。中央部の圃場はこのために収穫が遅れているものと思われる。この時期の扇田は、コンバインで収穫された跡は黄色い藁くずの列、白いゼニールの笠をかぶった杭掛けの隊列、黄緑の収穫を待つ圃場など

色とりどり、モザイク状の景観で見応えがある。

一本松公園から四方を見渡す風景も抜群、北の方には月山と葉山が望める。両者ともになだらかで似たような山谷であるが、月山の山嶺はきわめてなめらかであるのに対して、葉山は多少ごつごつとして凹凸がある。東から南に目を転ずれば、白鷹丘陵の上に蔵王連峰、お椀を伏せたような雷山、鷹が羽を広げた形をしている白鷹山などが並び、その下には最上川の流れ。南西方向には近くの山と山の合間から朝日岳が姿をみせている。柵田とともに堪能させられる風景である。

再び扇田に目を戻し、話を聞こうと思ひ人影を探したが、見当らなかった。高台の公園から下り、止まっている作業用の軽トラックを目印に近寄ってみると、おじさんがイネの掛けかえをしていた。作業の手順を覚えるために手伝うことにする。二把ずつ手渡すと手際よく積み上げていく。先程の観察で見落としていたのは、最初二把を横木の上に置くと、次の二把は一八〇度回転させた反対方向に置き、三段目から九〇度ずつ回転させて積んでいることである。おじさんは能中の人、海野泰市さん七六歳、七三歳の奥さんが脳溢血で倒れて以来農作業は一人。これまでは奥さんと二人の作業で、「お前さんのように稲束を渡してくれていた」と仰しゃる。多少なりとも役に立っているという充実感を味わう。作業は、内側にしていた稲穂を外側にする二回目の掛けかえ。農協に出荷する米は掛けかえ一回、自家用は掛けかえを二回するそうだ。段数は六〇段前後でバラツキがあり、正確に数えて作業が行われているわけではない。

作業が終わる、話を聞く。奥さんはほとんど障害はなく家事と孫の世話に専念、農協に勤める息子、病院職員の嫁、三人のお孫さんと同居する賑やかな家族。四〇戸の集落のなかでも重世代家族は四〜五戸。集落については半分が副業農家、半分は主業農家。海野さんは六〇アの水田とりんこ六〇ア、もも六ア、ラ・フランス一アを経営している。能中の農家は樞平の背後にある果樹園で食べているということであった。



次の作業のため、そば畑に向かう車でバスを降りた国道まで送ってもらう。先程イネの掛けかえをしていたおじさんの姿はすでになかった。杭掛けにこだわった山形の棚田巡りであったが、その分布については明快な答えはえられなかった。

後日、山形県内八〇〇か所で地域づくりのワークショップをひらいたという伝説の県職員、高橋信博さんに県南部を案内してもらった。それまで山形県は杭掛け一色と思っていたが、そうでもなく、ところどころでハサ掛けがみられた。たとえば、白鷹町萩野や長井市伊佐沢の一部はハサ掛け、白鷹町滝野ではハサ掛けと杭掛けが隣り合わせにあつた。ハサは田圃のなかに立てられ、横木、支柱ともにスギの丸太が使われ、四〜六段掛けの堂々たるもの。何故、杭掛けとハサ掛けになるのか。県や自治体の職員 地元農家の人たちに聞いてみた。杭掛けになるのは横木の竹が得にくいから、風が強いから、日照が長いから、労力が乏しいからなどの理由をあげられる。しかし、白鷹町滝野のように隣合わせで杭掛けとハサ掛けが並存する事例もあることから、十分に納得させられる解答ではなく、疑問を残して山形の旅を終えることになった。

## 215 第五章 古道・旧街道・国道旧道をゆく

ら、これは通常の川の滝ではな  
くて、戸ノ口堰という水路の  
一分枝の途中に懸かっているの  
だった。

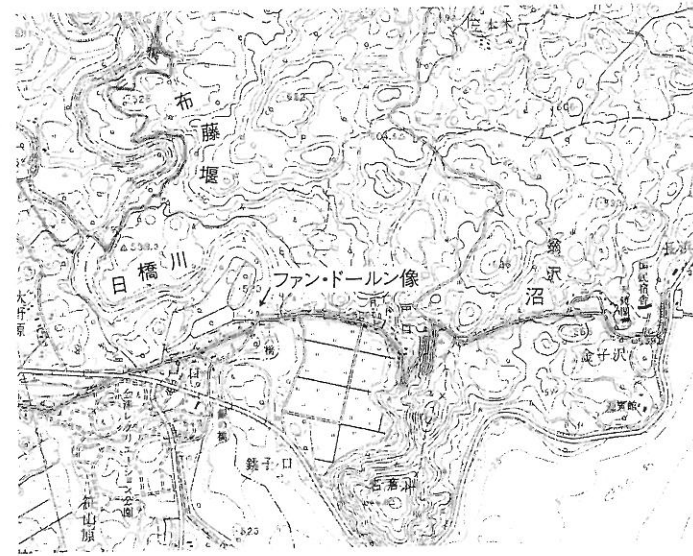
登るにつれて路は、踏み心地  
抜群の草路になって、一段と足  
がはずむ。そして草路のまま、  
峠にかかると。

峠といってもほとんど登りつ  
切りの片峠で、下りの路の勾配  
はごくごくゆるく、限りなく平  
坦に近い（ここはもう猪苗代湖  
の旧湖盆の沖積地なのだろう）。  
ふたたび砂利路となった路面を  
坦々と三〇〇メートルほど歩くと、  
国道二九四号にぶつかった。

チェリーピンクや赤紫の小さ  
な花が群れ咲く路傍の叢の中  
に、「右白河、左~~山~~道」と彫ら  
れた、古びてくすんだ梅紫色の  
石の道標が、ひそやかに立って  
いた。その通り、右は今歩いて  
きた白河街道の続き、左は六〇  
メートル先の強清水でさっき  
見送った二本松街道に入る道な  
のだ。

で、もともとの予定にしたが  
って、国道二九四号を北へ行  
き、二〇〇メートル先で強清水  
に向かう道に入る。

強清水はその名の通り、湧き  
水のあるところ。十字路の一角



#### 4 一 杉山「福島県」農村集落が多様な姿の蔵の町になっている

会津若松と新潟を結ぶJR磐越西線の喜多方駅で降りると、駅前からすでに小ささまざまな蔵が並ぶ。さすがは蔵の町といわれるだけのことはある。杉山は、市街地から北東の方向、九キロ行ったところにある農村だが、農村が蔵の町になっているところが面白い。

しかし、その理由を語るには、喜多方の町のことに触れる必要がある。喜多方の町の誕生は古く、戦国時代の永祿七年（一五六四年）に市が始まった頃といわれる。会津ではその頃から年貢の半分が金納だったので、市で農産物を金に換える必要があった。これは農民の商人化を意味するため、藩の好むところではなく、それをいましめる触れ書きを頻発したけれども、藩の流通統制は足元から緩やかに崩れていき、その結果が商業流通の蔵の町を現出させたのである。

もっとも今のような二〇〇〇棟を越す蔵が造られたのは、明治一三年の大火以後のことだから、これほどあつたわけでもないようだが、喜多方の蔵は本来、商品蔵であり、大火でも焼け残って商品が守られたことを見ての急増であつたろう。杉山は一本の街道の両側に数十戸の農家が建っていて、どの家にも立派な蔵が付属している。農家に商品蔵の必要はなく、大火で村が全滅するほどの過密さでもないのに、なぜ蔵を必要としたのか。ひよつとするとこれは喜多方

の蔵にならつてのステータスであるのかもしれぬ。手の込んだ左官仕事で蛇腹や彫形が造られているし、屋根も切妻型、兜型と変化に富んだ様相なのは、それ故であろうか。

#### ●お役立ちデータ

〔種別〕農村集落

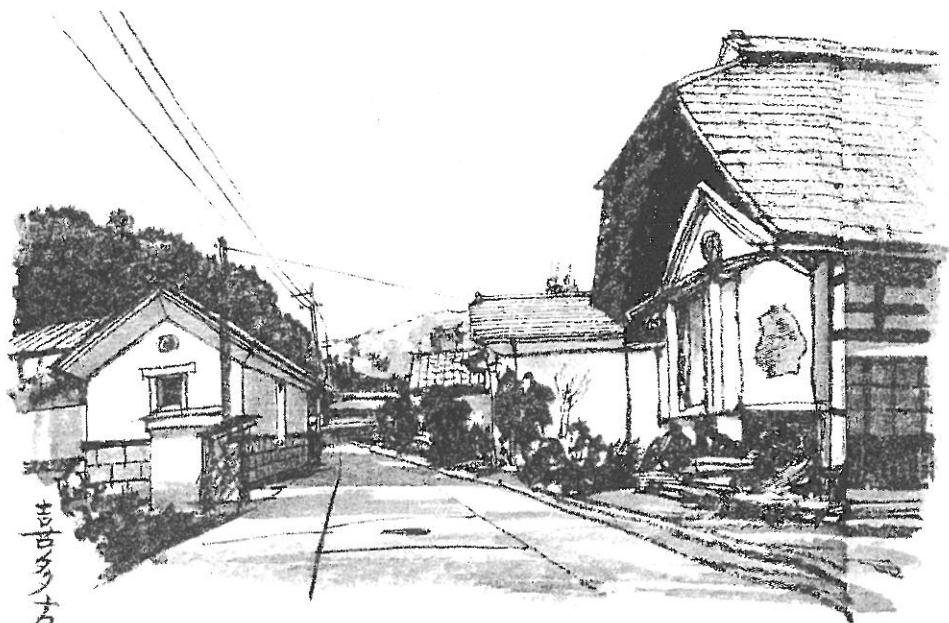
〔ポイント〕喜多方から足を延ばし、

杉山集落の景観を見るのがよい。

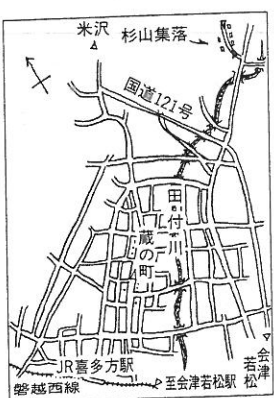
〔問い合わせ〕喜多方市商工観光課

☎0241・24・5200

〔交通〕会津若松か新潟からJR磐越西線で喜多方駅下車。杉山はバス。



喜多方

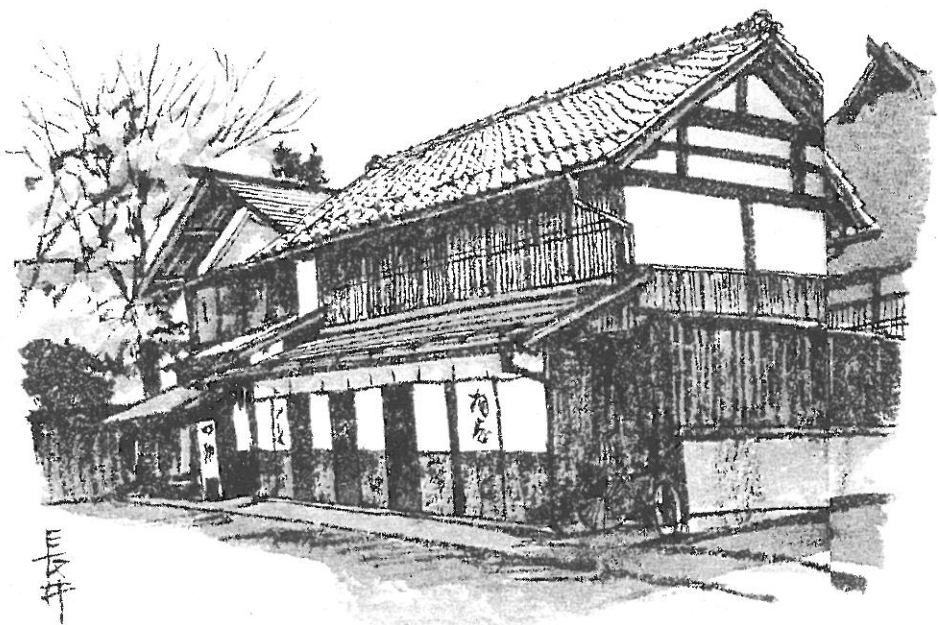


5 一 長井「山形県」最上川の舟運で栄えた証しを残す町

長井は最上川の上流米沢から、やや下流に位置する町である。新幹線の通っている現在の中心部、米沢、山形、新庄の南北ラインから西にそれているので、開発の波の及ぶ率が少古い家々を残しているが、元はといえば、ゆったりと流れる大河、最上川の舟運で物や人々だ時代に栄えた町である。最上川を下れば海港である酒田に着く。酒田には北前船の千石船港して、日本海、瀬戸内海を通じて上方と結ばれる。かくして長井は、上方文化の見られなくなった。

川筋の舟着き場から町の中心部に向かう道筋の十日町には、茅葺きの民家が四軒残っている。紺の暖簾、紙障子戸の商家もある。三〇〇年続いた呉服商「丸大扇屋」の屋敷だ。間口が広くことなく上方風の面影があつて、文化財として「文教の杜」と名づけて公開されている。元年建造の店、明治二三年の茅葺き二階建ての母屋、六つの土蔵をもつ堂々たる構えの屋敷る。この近くで細問屋の「やませ蔵」とか、明治初期の旧郡役所の建物などが見られる。

少し遠いが、市内南端の歌丸本郷に行ってみよう。このあたりには中世の頃から村が自衛環濠集落が造られていて、その原風景を残している。その伝統的景観を守るため



長井

葺き屋根の保存、壁などの修景や樹木に慮するなどの運動が進んでいる。ここから西の飯豊町黒沢、北隣の白鷹町萩野山にも美しい茅葺き屋根の家が見られ

●お役立ちデータ

〔種別〕 在郷町

〔ポイント〕 まとまった町並みではないが、歩けば堪能でき、

〔問い合わせ〕 長井市教育委員、☎0238・84・2111

〔交通〕 JR山形新幹線の赤湯駅、フラワー長井線で長井駅下車

